

# ASHOKA YOUTH VENTURE

## アショカ・ユースベンチャー

「変える力Changemaking Skills」が、新しい時代に欠かせない人材の能力であると私たちは信じています。ユースベンチャーは、「変える力」の練習の場とすることができます。

アショカ・ユースベンチャーは、2010年から2011年にかけてのリサーチおよび実験を経て、2012年春から東北の震災に特化した「東北ユースベンチャー・プログラム」として出発しました。2015年からは、東北の問題だけでなく、課題の幅を拡げています。対象は12~20歳までの若者です。「これはおかしい！頭にくる！」と感じたことが動機となって行動を起こす若者をアショカ独自の基準で「ユースベンチャー(YVer)」として認定し、彼/彼女が失敗を恐れず自由にチャレンジできる一年間の“実験の場”を提供します。2012年以来、これまでに85チーム（約350人）の「変える若者Young Changemakers」のネットワークができています。(2017年11月現在)。

### GOAL ユースベンチャーの目指すところ

外発的動機(名誉・地位・収入など)ではなく、内発的動機(本人だけがわかる充足感や幸福感)が原動力となって、社会のために行動する人間の育成を目指しています。脳科学では、「感情(情動)が目的を設定し(その後)思考が巡る」という通説があります\*1。つまり、「やりたい」と思えば、どのようにやるかを頭で必死に考えるが、それほどやりたくない、どうやってやらないで済むかを私たちは考えます。しかし、依然として人格の形成よりも、頭脳の司る能力に重点を置く教育が受け入れられています。

ユースベンチャーは、「これはおかしい！頭にくる！」という炎がある若者をリクルートし、その気づきから発した行動を活動にするため一年間実験する環境です。また、発想から行動までの全過程で、「メンター」「アドバイザー」などの大人が一切介入せず、自分とユースベンチャーのネットワークにいる他の若者との意見交換を通して前進することを鉄則としています。大人からの意見や反応は若者の心の奥底に聞こえる微かな声を消すことになりかねないからです。ユースベンチャーでは、つまずきは成長の糧とみなし、リスクをとることを奨励します。

従来の「優秀さ」を測るための基準(情報収集能力、暗記力、偏差値、読解力、計算力など)に加えて、新しい時代に欠かせない能力は、「変える力 Changemaking Skills」であると私たちは信じています。

#### \*1参考文献

アントニオ・ダマシオ (Antonio Damasio) 「無意識の脳・自己意識の脳」

ダニエル・ピンク(Daniel Pink) 「ハイコンセプト」

ダニエル・ゴールドマン(Daniel Goldman) 「EQ心の知能指数」

### ACTIVITY DESIGN ユースベンチャーの活動デザイン

#### ① 候補者リクルート

常時、ユースベンチャー(YVer)候補となる若者を発掘するため、スタッフはソーシャルアクションを起こす若者が集まるイベント等に参加しています。また過去5年間の活動を通してわかったことは、ユースベンチャーの活動をする(した)若者の周辺に新たなポテンシャルを持つ若者が生まれるというパターンがあることです。

## ② 審査パネル (2~3ヶ月に1度)

主に東京、東北、関西で開催。ユースベンチャー候補の若者を、ユースベンチャーとして認定するかを決めるための審査パネルを開催します。毎回、様々な分野で活躍する大人を3~4名パネリストとして招きます。パネリストは、私たちのビジョンと基準に共鳴をくださり、ビジネス界、教育界、行政、市民セクターの影響のある方達を招いています。全て公開の審査会です。

審査では、「内発的モチベーションによる活動か」「(頭の中にあるアイデアではなく)実際に行動しているか」を最大の選定基準としています。

## ③ ウィー・アー・ザ・チェンジ We are the Change (年間2回の大集会)

2013年から始動し2017年10月までに9回実施しました(次回は2018年2月17日予定)。パネル審査会と同じく誰もが参加できます。パネル審査会や活動報告会に加え、YVerが自ら考案したコンテンツを盛り込み、「私たちが社会を変えられる」と参加者が感じ行動につなげられるような場をデザインしています。参加者とYVerがコラボレーションし、YVの活動が推進する例もこれまでに生まれています。

### BENEFIT ユースベンチャーになったら

1. 必要に応じて、最大10万円の活動出発金を受けられます。
2. 全国・海外にあるユースベンチャーネットワークの一員となります。
3. すでに社会人となった元ユースベンチャーとブレインストームする機会が得られます。
4. 海外留学や海外渡航の際、興味分野のフェローやアショカスタッフを尋ねることができます。
5. 活動期間中、スタッフと自由に話をしたりブレインストームすることができます。
6. 来日するアショカ・フェロー(アショカの基準で認証を受けた社会起業家)の講演や夕食会に招待されます。
7. 「変える力」を21Cリーダーの能力とみなす米アトランティック大学(COA)への奨学金が当大学より支給されます(年間\$10000まで)。

ストーマー・システム\*2 stormers systemについて

2012年から始動し現在85組のネットワークを形成しているYVは、次第に年齢差や地理的な距離が目立ってきています。そこで、自然発生的なYVer同士の繋がりだけでなく、恣意的な交流の場を増やす試みを、本年度からスタートしました。その一つが「ストーマー・システム」です。現役のYVerと、YVerアラムナイ(YVの任期を終え、社会人となり、かつビジョンを持って活動している若者たち)をテレビ電話でつなげ、現役YVerがプロジェクトや自身についてシェア、ともにブレインストームする場を作っています。決して、現役YVerに対してアドバイスや評価をしないという鉄則は、ユースベンチャー・プログラムと共通です。このやりかたは、時間の余裕のない生活では得にくい視点を育て自分の心の奥を注視する習慣をつくります。

### YOUTH VENTURERS ユースベンチャーの例 \*()内は審査パネル当時の年齢

#### ・山崎紀奈里(17) Kinari Yamasaki

地元で取れる甘藷と牡蠣の殻を肥料にし、地元の中高生や婦人会の人たちと「あまvege」という野菜を作る。これにより、中高生が地元に興味を示し、地域全体が元気になるという変化が生まれつつある。

#### ・八重樫美里(17) Misato Yaegashi

放課後に、高校生が自分の得意なことを教えたり、教えられるシステムをつくっている。お金のある家庭の子供だけが習い事をできるという矛盾を変えることが目標だ。

### ・ミシュラ桃雛(18) Tuhina Mishra

日本でのサモサの販売を通して、インドの貧困層の子どもたちが学校へ通うための奨学金制度を生み出している。

### ・木村元哉(20)&湯澤魁(20) Motoya Kimura & Kai Yuzawa

学生が参加できる、福島第一原発への視察ツアーを主催。原発や周辺地域についての勉強会やフィールドワーク、学生が各々の言葉で情報発信する場を盛り込み、一人一人が主体的に復興に関わることを目指している。

### ・寺崎幸季(15) Yuki Terasaki

東日本大震災で家を失い、住むことを余儀なくされた無機質な仮設住宅。一人一人が「家」と呼べるようにするために、カラフルな手作りのマグネットで仮設住宅を彩る。

### ・船橋理仁(17) Rihito Funahashi

従来の学校教育の「先生が一方的に生徒に知識を教える」形態に違和感を覚え、教える側も学ぶ側も高校生が担い、同じ立場となる「高校生教室」を開催。

### ・橋本陸(17) Riku Hashimoto

家族を急病で亡くした経験がきっかけとなり、一般市民向けの応急手当て講習や地域のイベントでの救護活動を定期的に行っている。一人でも多くの命が助かることを目指している。

### ・村上鴻(18) Hiroshi Murakami

「良い学校に入り良い企業に就職する」ことが人生の究極のゴールであるという固定観念に疑問を感じ、生きづらさを感じながら育ってきた。自分の基準で「幸福」を定義する人々のコミュニティをつくることを目指している。

### ・下城茜(19) Akane Shimojo

本に囲まれて育つ中で、本は新たな発想に出会い、それを他者へ伝えることができる素晴らしい源だと考えるようになった。世界でたった一冊の自分だけの絵本を作るワークショップを、被災地の子ども向けに開催している。

### ・山本翔(17) Kakeru Yamamoto

「まだまだ元気で誰かの役に立ちたい」と願う地域の高齢者と、一人で夕食を食べなければならない孤独な子供たちをマッチメーキングするwin-winの仕組みを作った。

## ASHOKA LEVERAGE 学生の時YVerとして活動した若者対象の新しい取り組み

### アショカ・レバレッジ

卒業後、社会人となる際に自分のライフプロジェクトとして活動に取り組むことを決めたYVerを「アショカ・レバレッジ」の対象とし、サポートするプログラムを2017年4月に開始しました。（必要な場合は）事業が軌道に乗るまでの最低限の生活費のほか、アショカのパートナー企業でのプレゼンの場や有益な情報の提供、法律事務所からの無料の相談などを内容としています。2017年秋現在1名。